古都洛陽の都市再生の基盤－文化表象から見る洛陽の文化

長崎大学大学院生産科学研究科
黄　婕

中国の経済が急速発展の時代に入り、都市建設も世界の画一化に向けた流れが加速する。地方官僚は行政成績と経済効果ばかりを追求し、都市それぞれ独特な気質が失いつつある。本論文は古都洛陽の現状と問題を取り上げ、古い都の現代社会における理想的な在り方を求めるために、日本の古都である京都のケーススタディを先行研究にした。

京都の遷都の衝撃から復興の歩みを回顧しながら、文化の力が京都再生の原動力という認識ができた。京都モデルは歴史都市（特に古都）の大きな方向性と可能性を示した。その真義は、再生不可能な歴史文化資本を都市発展の源として位置付け、優れた文化環境の構築によって、文化の力で各領域の連動を推進し、復興を実現することである。京都モデルは地理環境、自然気候、特に文化の基盤がよく類似している洛陽にとって、非常に現実的な意味がある。

京都の啓発を受け、本研究は古都洛陽の文化力による都市再生の基盤になる洛陽の文化について展開した。「洛陽の文化」とは、「文化」に「洛陽」という特定地域を加え、二つが融合して形成される固有の価値を称するものであり、当時の洛陽に住む人や関連する人々の智識、道徳、趣味等を基礎として築き上げられたものと指す。本研究は歴史を軸に、文化表象をキーワードとして、文学作品や文化現象に反映している洛陽の時代像を考察・分析し、その本質的な特徴を捉えるようにアプローチする。内容及び結論は以下のように要約する。

先秦時代から宋代までの歴史を五つの時代に区分し、洛陽の文化のあり方と特徴を下記のようにまとめた。

①先秦時代：天下の中心

洛陽盆地の中心部は中国文明の発祥地であり、周王朝は洛陽地域を天下の中心として都を建てた。これは洛陽が天下の中心とされた原点となり、高い文明や王朝の正統性を象徴するイメージを形成した。洛陽のこのイメージは長い間に続いた。

②両漢（特に後漢）時代：礼儀道徳の象徴

後漢は礼楽制度を回復するために、洛陽を都にし、礼制を象徴する建物の建築や太学の設立、白虎通議を以て、儒教国家の成立を示した。漢の代表的な文学様式賦の都邑賦は洛陽の儀礼制度、道徳教化を謳歌し、礼儀道徳を象徴するイメージを築いてきた。都洛陽を代表とする後漢時代の士風が後世にも高く評価されている。

③魏晋南北朝時代：文化の融合

大分裂の時代に、渦中になる洛陽は戦争の被害を受け、文化的な衝突も最も激しかったが、奇跡的に何度も復興し、多くの新しい文化を生み出した。魏晋南北朝のほとんどの文化事象は洛陽と繋ぎ、「自覚の時代」と呼ばれる文化の飛躍もここから始まったのであり、この場所から思想、民族、宗教の三つの面から融合する趨勢が見られる。

④隋唐時代：文化的なアイデンティティ（文化の帰属感）

洛陽は詩の黄金時代の唐代の詩作中に頻度高く現れている。この特有の文化現象は、洛陽が当時の文化人に特別に注目・意識されていたことを意味する。唐代の代表的な作品と詩人を取り上げ、士人達の洛陽に対する感情の軌跡と根源を探究した。洛陽が持っている文化的求心力、即ち文化的故郷のようなアイデンティティを明らかにした。

⑤宋代：儒学復興の源流

宋代儒学の復興の幕が最初に洛陽で開いたのは時代と歴史の産物とも言える。二程子の洛学の形成、伝達、確立及び伝承まで、文化中心として洛陽の位置づけは重要な意味がある。理学は洛陽の風土（地望、政治情勢、風俗など）と相乗効果を生み、正統的な地位を確立し、漸く朱子によって大成され、新しい時代を切り開いた。

以上、洛陽文化のあり方について、時代の順で文化表象を通して明らかにした。洛陽という地は、中国王朝史の 4 分の 3、紀元前 2000 年から後 1000 年後までの 3000 年を超える長い期間、歴史の枢要かそれに準ずる位置を占めていた。この地域を背景とした時間と空間を交えて生成した文化表象の多くは、実は時代より一歩先に文化を発信し、中華文明の核心的部分—漢文化の発展と変革を生み出した。即ち、洛陽の文化自身は中華文化の漢文化の核心的な存在である。古代から近世までの中華文明をこの空間を通して通観することが「洛陽の文化」の価値であり、世界に発信するべき使命でもある。

本論は先秦時代から宋までの洛陽の文化を巨視的に捉え、継続性を持つ文化表象を通して綜合的に考察、分析し、ある意味で洛陽の文化に関する研究分野の空白を埋めた。本研究の結論と洛陽の都城遺跡を結び付けるによって、洛陽の位置づけを個別の王朝から抜け出して、中華文明をより高い視点から俯瞰することが可能になり、これからの興味深い課題である。